

南島原市文化財調査報告書 第26集

石 原 遺 跡

—水利施設等保全高度化事業特別型(畑地帶担い手育成型・見岳地区)に伴う発掘調査—

2021

長崎県南島原市教育委員会

南島原市文化財調査報告書 第26集

石 原 遺 跡

—水利施設等保全高度化事業特別型(畑地帶担い手育成型・見岳地区)に伴う発掘調査—

2021

長崎県南島原市教育委員会

発刊にあたって

本書は、長崎県による水利施設等保全高度化事業特別型（畠地帶
担い手育成型・見岳地区）に伴い実施した石原遺跡の発掘調査報告
書です。

石原遺跡は、事業の計画段階で実施した試掘調査によって新規に
発見され、今回の本発掘調査を実施することとなりました。本発掘
調査では、中世の掘立柱建物跡をはじめとした遺構と、縄文時代、
弥生時代、中世の遺物が検出されました。

南島原市内においては、ほ場整備事業をはじめとする各種大型開
発事業が今後も継続して実施される計画ですが、地域の貴重な歴史
的情報を含む埋蔵文化財の損失を最小限にできるよう、今後も努め
てまいりたいと存じます。

末尾になりましたが、発掘調査の実施にご協力くださいました
土地所有者と耕作者の皆様、事業関係の方々、調査に従事ください
ました皆様方に厚く御礼申し上げ、発刊の挨拶いたします。

令和3年3月31日

南島原市教育委員会
教育長 永田 良二

例　　言

- 1 本書は、石原遺跡（長崎県南島原市西有家町見岳字石原所在）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長崎県が事業主体である水利施設等保全高度化事業特別型（畠地帯扱い手育成型・見岳地区）に伴い、南島原市教育委員会が主体となって実施した。
- 3 調査は、以下の期間と面積で実施した。

試掘・確認調査	平成26年8月18日～平成26年10月23日	160m ² (4 m ² の調査坑40箇所)
	平成27年8月17日～平成27年10月30日	156m ² (4 m ² の調査坑39箇所)
	平成28年11月1日～平成28年12月26日	68m ² (4 m ² の調査坑17箇所)
本調査	平成30年8月31日～平成31年3月8日	1,066m ²

- 4 現地調査及び本書作成に係る整理調査の主体及び担当は、以下の通りである。

調査主体

南島原市教育委員会	教育長	永田 良二
	教育次長	渡部 博 (平成27年度～平成28年度)
	同 上	深松 良藏 (平成29年度～平成31年度)
	同 上	栗田 一政 (令和2年度)
	理事	宮崎 誠 (平成31年度)
	文化財課 課長	松本 慎二 (~平成31年度)
	同 上	岡野 博明 (令和2年度)
	文化財課文化財班 班長	木村 岳士 (~平成29年度)
	同 上	末永 透 (平成30年度)
	同 上	鬼塚 俊範 (平成31年度)
	同 上	梶原 知治 (令和2年度)

調査担当

試掘・確認調査

南島原市教育委員会	文化財課文化財班	主事 大熊 球奈 (平成26年度～平成28年度)
本調査		

南島原市教育委員会	文化財課文化財班	主事 (学芸員) 小川 康晴
-----------	----------	----------------

整理調査

南島原市教育委員会	文化財課文化財班	副参考 (学芸員) 本多 和典
		主事 (学芸員) 小川 康晴
		主事 (学芸員) 竹村 南洋

- 5 試掘・確認調査における写真撮影及び土層実測図の作成は、大熊が行った。本調査における写真撮影は、小川が行った。また、遺構配置図及び土層実測図の作成、航空写真の撮影は、(株)埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。
- 6 遺物の実測及び製図は、(株)埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。遺物の拓本は、小川が行った。遺物の写真撮影は、小川・竹村が行った。
- 7 本書における遺物・図面・写真等は、南島原市深江埋蔵文化財整理室で保管している。
- 8 本書は、小川が執筆し、本多が編集した。

本文目次

第Ⅰ章 位置と環境	1
第Ⅱ章 調査の概要と成果	2
第1節 調査の概要	2
(1) 試掘・確認調査	2
(2) 本調査	2
第2節 調査の成果	6
(1) 土層	6
(2) 遺構	6
(3) 出土遺物	13

挿図目次

第1図 石原遺跡位置図 (S = 1/100,000)	1
第2図 見岳地区範囲図 (S = 1/10,000)	2
第3図 試掘・確認調査坑配置図（北東側）(S = 1/4,000)	3
第4図 試掘・確認調査坑配置図（南西側）(S = 1/4,000)	4
第5図 調査区の位置とグリッド配置図 (S = 1/600)	5
第6図 調査区北側東壁土層断面図 (S = 1/60)	7
第7図 調査区南側東壁土層断面図 (S = 1/60)	8
第8図 東西ベルト土層断面図 (S = 1/60)	9
第9図 V層上面遺構配置図 (S = 1/600)	10
第10図 IV層上面遺構配置図 (S = 1/600)	11
第11図 掘立柱建物跡実測図 (S = 1/50)	12
第12図 出土土器実測図① (1~37 : S = 1/3, 38 : S = 2/3)	14
第13図 出土土器実測図② (S = 1/3)	15
第14図 出土土器実測図③ (S = 1/3)	16
第15図 出土土器実測図④ (S = 1/3)	17
第16図 出土土器実測図⑤ (S = 1/3)	18
第17図 出土石器実測図① (S = 2/3)	22
第18図 出土石器実測図② (S = 1/3)	23
第19図 出土石器実測図③ (S = 1/3)	24

表目次

第1表 出土土器観察表①	19
第2表 出土土器観察表②	20
第3表 出土土器観察表③	21
第4表 出土石器観察表	25

図版目次

図版1	遺跡上空から高岩山を望む（南から）	29
図版2	本調査区俯瞰（写真上が北）	30
図版3	調査区南側西壁（南東から）	31
	R区内ベルト中央付近（南西から）	31
図版4	E区北壁（南東から）	32
	J区北壁（南東から）	32
	N区北壁（南東から）	32
図版5	調査区北側V層上面（北西から）	33
	調査区南側V層上面（北から）	33
	掘立柱建物跡（北西から）	33
図版6	Q区弥生土器集中地点（西から）	34
	遺物出土状況①	34
	遺物出土状況②	34
図版7	遺物出土状況③	35
	表土剥ぎ状況	35
	作業状況	35
図版8	出土土器①	36
図版9	出土土器②	37
図版10	出土土器③	38
図版11	出土土器④	39
図版12	出土土器⑤	40
図版13	出土土器⑥	41
図版14	出土石器①	42
図版15	出土石器②	43
図版16	出土石器③	44

第Ⅰ章 位置と環境

石原遺跡は、長崎県の島原半島東部に位置しており、行政区としては南島原市西有家町見岳に所在する遺跡である。

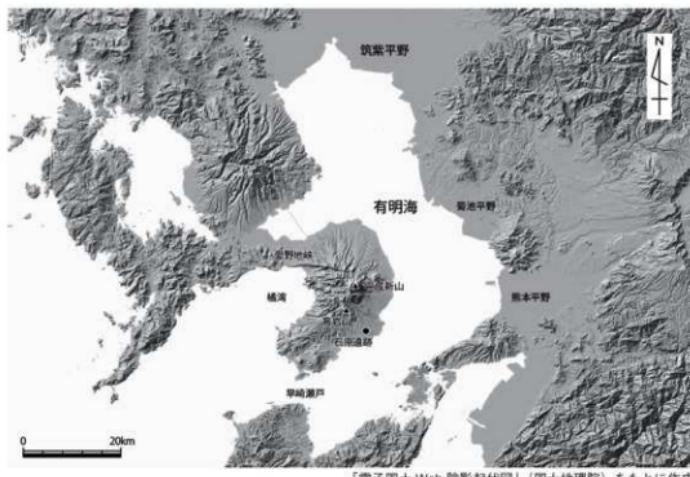
島原半島は、県の南東部に位置しており、その形状は「胃袋状」、「ソラマメ形」などと形容されることが多い。県央地域とは、半島北西部にある幅約3kmの愛野地峡で連なる。また、半島中央は主峰の平成新山（標高1,483m）をはじめとした雲仙山系の山々がそびえており、南部域を除く半島一帯の地形はそれらの火山活動によって形成されている。半島の北岸から東岸は内海である有明海に面しており、西岸は橘湾に面している。

西有家町は、島原半島の東側に位置する。平成18年の市町村合併を経て南島原市となり、現在に至る。町の北部には、雲仙三岳五峰の一つ高岩山（標高881m）がそびえる。また、南山麓は有明海まで傾斜地となり、複数の河川が傾斜に沿って流れている。いずれも雲仙山系を水源としており、有家川、須川川、龍石川、見岳川等がある。

石原遺跡は、見岳地区の事業区域のうち、中央よりやや北東に位置している。遺跡の周辺は、有家川と見岳川に挟まれた丘陵地帯であり、緩斜面を利用して農業が盛んに行われている。

＜参考文献＞

西有家町郷土史編さん委員会編 1998 『西有家町郷土史』 西有家町



第1図 石原遺跡位置図 (S=1/100,000)

第Ⅱ章 調査の概要と成果

第1節 調査の概要

(1) 試掘・確認調査

平成25年度、長崎県島原振興局により見岳地区のは場整備事業が計画された。島原振興局との協議の結果、南島原市教育委員会が調査主体となり、平成26年度から平成27年度において試掘・範囲確認調査を実施することになった。調査の結果、「新堂原遺跡」「東新堂原遺跡」「石原遺跡」「東石原遺跡」の4遺跡を新規発見した。また、既知の遺跡であった「野中遺跡」の範囲縮小を行い、「野中A遺跡」「野中B遺跡」「野中C遺跡」「野中D遺跡」とへ分割した。平成28年度は追加で範囲確認調査を実施し、「石原遺跡」「東石原遺跡」「東新堂原遺跡」の範囲縮小を行った。平成26年度から平成28年度にかけて実施した試掘・確認調査は、全部で96箇所(TP. 1~96)である。

石原遺跡は、平成26年度に実施した試掘・確認調査のTP. 22, 23, 88, 90で遺構・遺物を確認したことにより新規発見とした遺跡で、その後平成27年度の確認調査において遺跡の範囲縮小を行った。

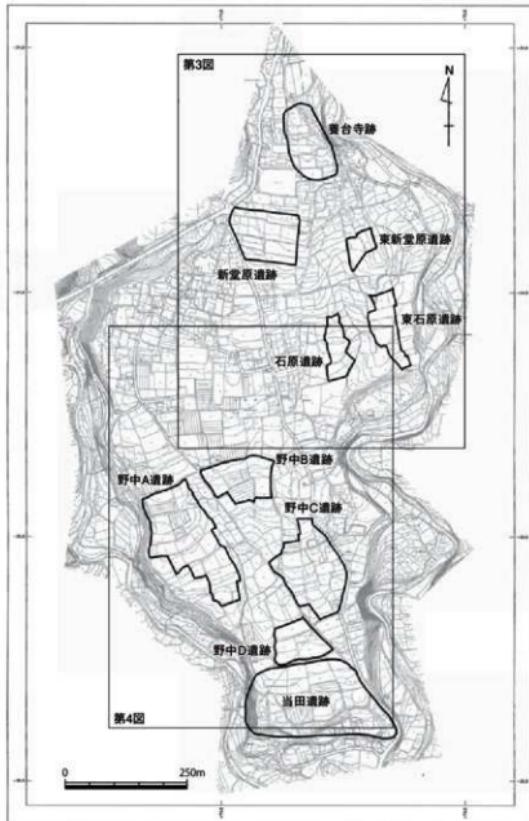
(2) 本調査

試掘・確認調査の結果をうけ、平成30年度に石原遺跡の本調査を行った。調査は、遺跡内農業用道路の設置及び区画整理工事を行う範囲において設定しており、調査面積は1,066m²である。

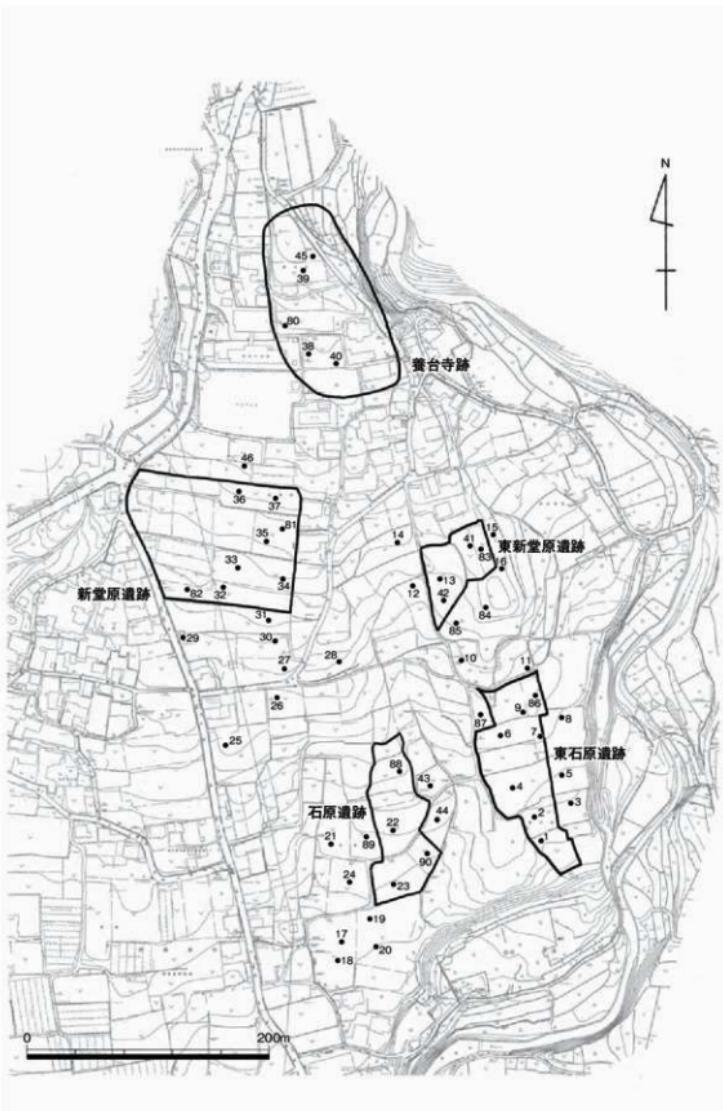
調査はまず、重機によって近・現代の耕作土等の表土剥ぎを行った。その後、調査区をAからRの小調査区に分割した。小調査区A区、G区、L区周辺はV層まで後世の削平を受け、遺物包含層は失われていた。その他の区域は遺物包含層が残存しており、特にE区周辺とR区以南はII層以下の残存状況が良好であった。遺物包含層の掘削は層位ごとに、遺構・遺物の検出作業を行った。

調査全体を通してピット等を確認したが、不整形なものが多く、遺構認定に至らないものがほとんどである。III層掘削時は弥生中・後期土器の出土量が多く、一部に集中している範囲(第10図参照)を確認した。また、調査区南側のV層上面では自然流路を検出しておらず、北東から南西へと下っていた。

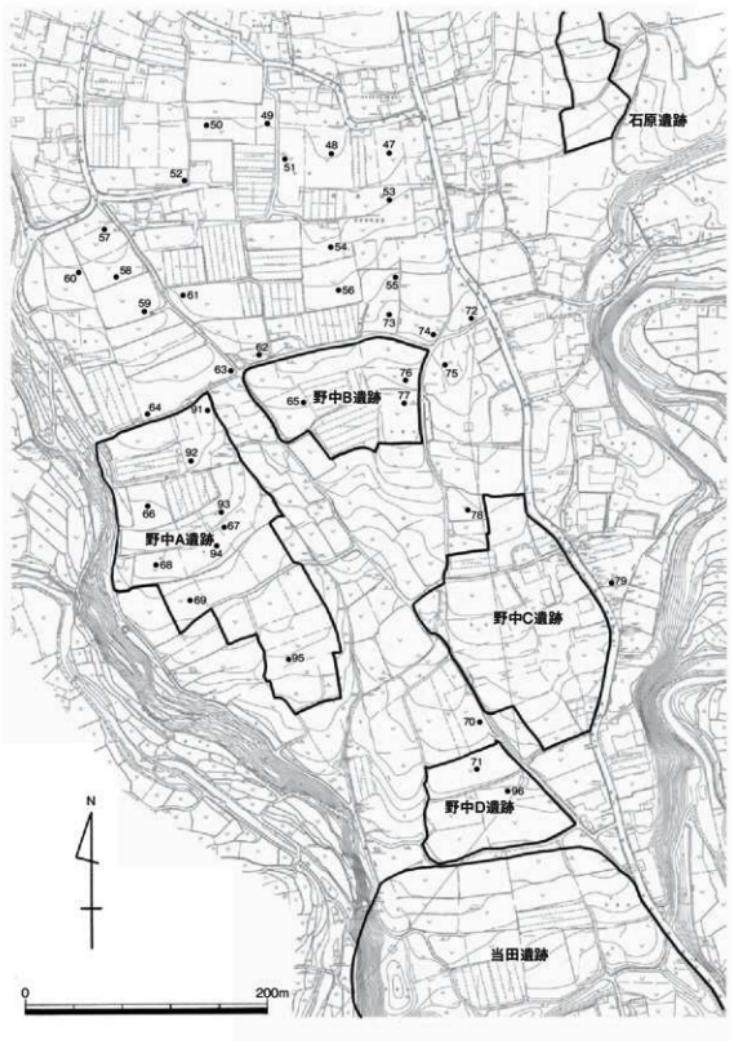
調査終了後は、工事を控えていたため埋め戻しは行わず、島原振興局へと調査区を引き渡した。



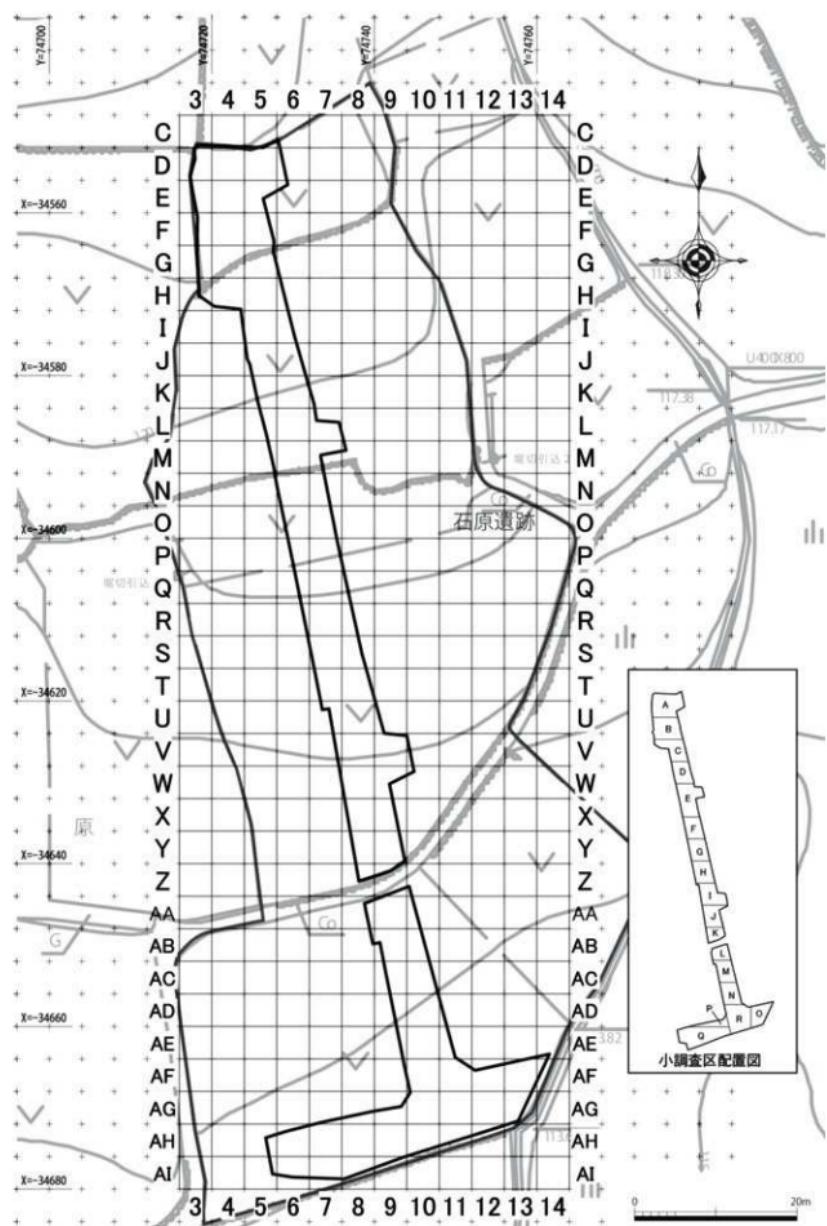
第2図 見岳地区範囲図 (S=1/10,000)



第3図 試掘・確認調査坑配置図（北東側）（S=1/4,000）



第4図 試掘・確認調査坑配置図（南西側）（S = 1/4,000）



第5図 調査区の位置とグリッド配置図 ($S=1/6000$)

第2節 調査の成果

(1) 土層

本調査で確認された基本層序は以下の通りである。

I a層 褐色土。耕作土。

I b層 暗褐色土。表土下の基盤土。

I c層 近世以降の造成土。

II 層 黒褐色土。古代・中世の遺物包含層。

III 層 黄褐色土。弥生時代中・後期の遺物包含層。(見岳地区試掘・確認調査基本土層Ⅱ層)

IV 層 暗褐色土。縄文時代後・晩期の遺物包含層。(見岳地区試掘・確認調査基本土層Ⅲ層)

V 層 黄褐色土。暗褐色土を斑に含む。(見岳地区試掘・確認調査基本土層Ⅳ層)

VI 層 黒褐色土。

VII 層 明黄褐色土。しまりが強い。

II～IV層において遺物を検出している。II層は今回の本調査で新たに確認した遺物包含層である。青花や青磁、土師質土器等を含む。III層・IV層の遺物出土状況は、見岳地区的試掘・確認調査と比較しても概ね整合性がとれている。一方、V層は過去に行われた見岳地区的試掘・確認調査において縄文時代早期の遺物包含層であることを確認しているが、今回の本調査において遺物の出土はなかった。

(2) 遺構

今回の調査では、検出作業を行った各層位の上面においてピット状のものを確認したが、平面形・断面形ともに不整形なものが多く、自然営為によるものがほとんどであると判断し、遺構認定を行ったものはごく一部である。主な遺構としては、V層上面から掘立柱建物跡を1棟検出している。

J区付近とR区付近の2箇所では、弥生土器が集中している範囲を確認したが、周間に掘り込み等は認められなかった。

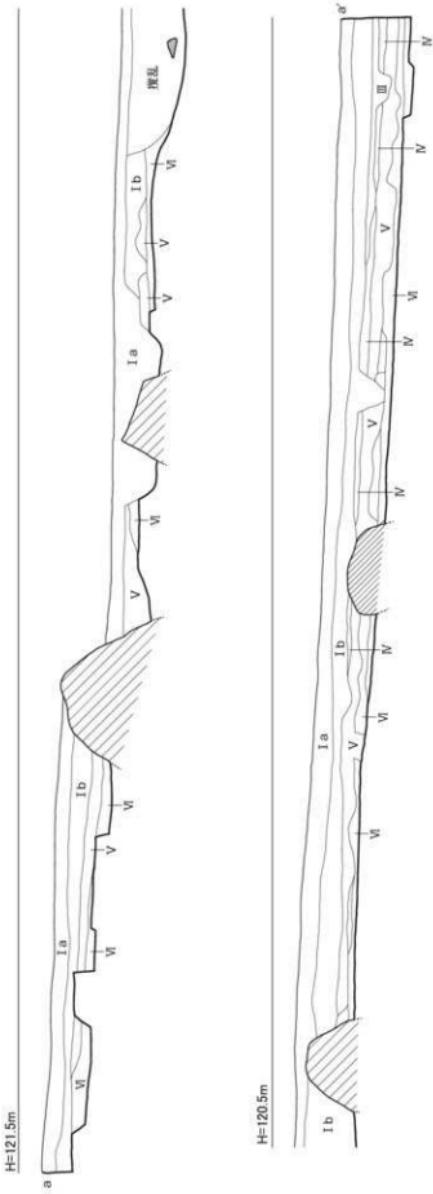
掘立柱建物跡

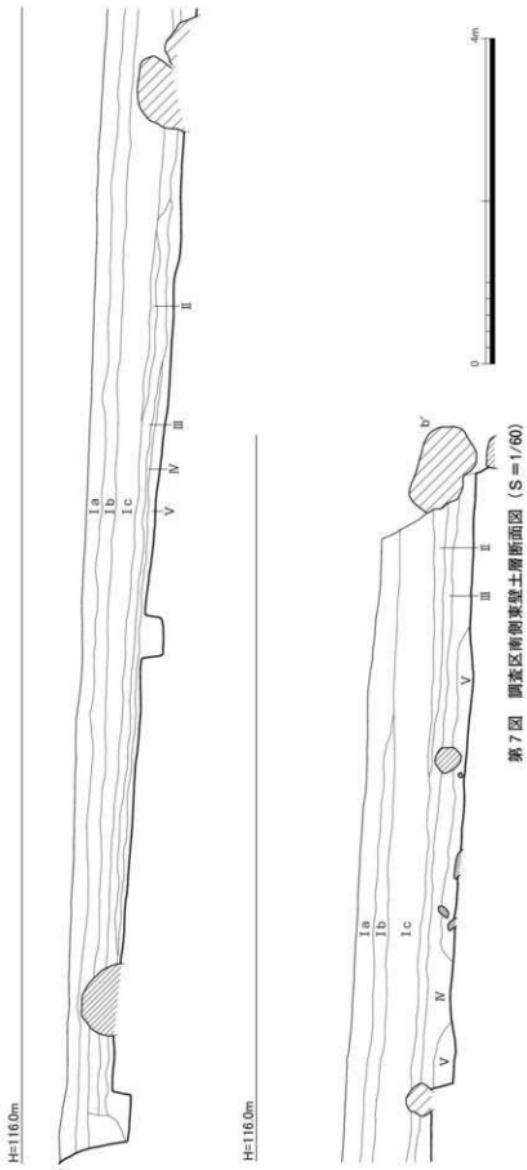
小調査区G区のV層上面で確認した。G区は後世の削平を受けており、表土掘削後はV層がわずかに残存する状況であったが、覆土はいずれの柱穴もII層土で充填されていた。よって本来の検出面はIII層上面であろう。また、北側の並びは中央の柱穴を欠くが、本来柱穴が存在していたであろう位置に大礫を廃棄した近世以降の土坑を確認しており、柱穴はそれによって失われたものと考えられる。

間数は2間×2間であり、梁行4.05m、桁行4.46mで、梁行1間の長さは約2m、桁行1間の長さは約2.3mである。遺構の主軸は南北に走り、僅かに北西(N-8°-W)に向ける。

4m
0

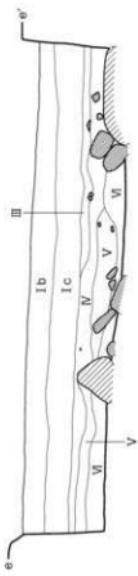
第6図 調査区北側東壁土層断面図 ($S = 1/60$)



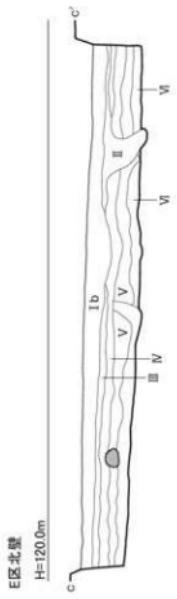
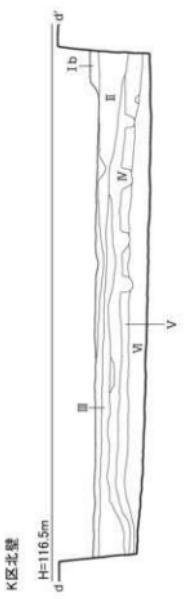


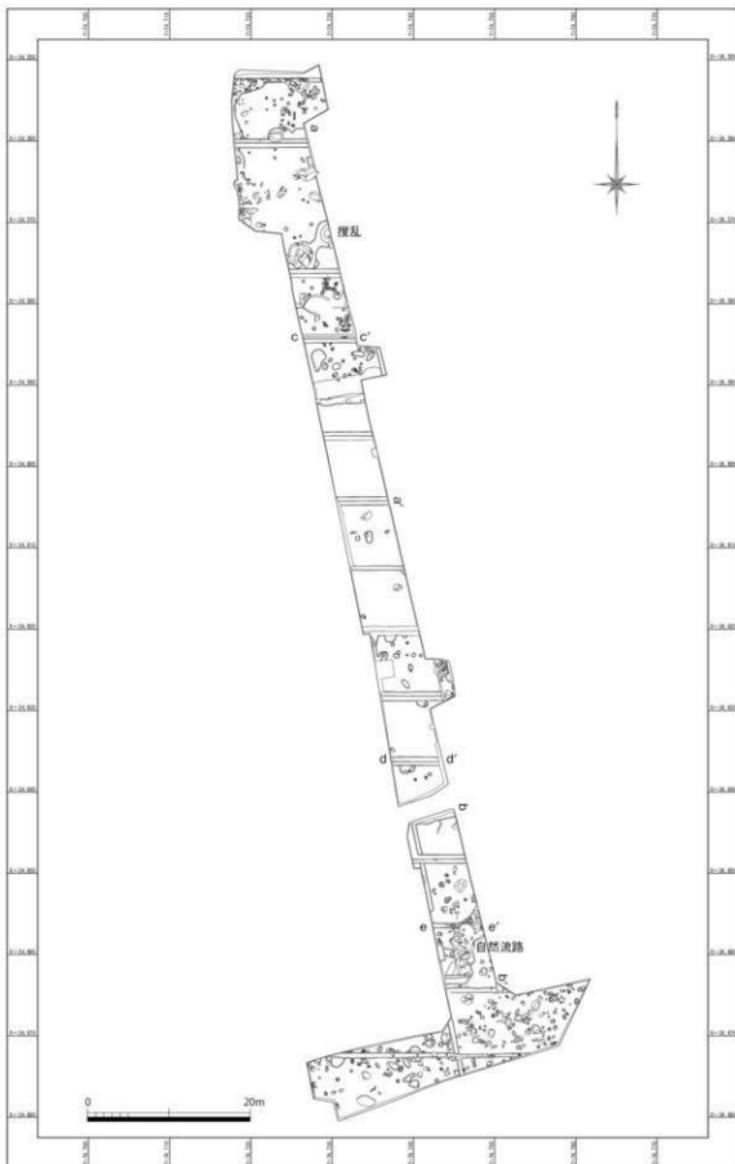
第8図 東西ペルト土層断面図 ($S = 1/60$)

0 4m

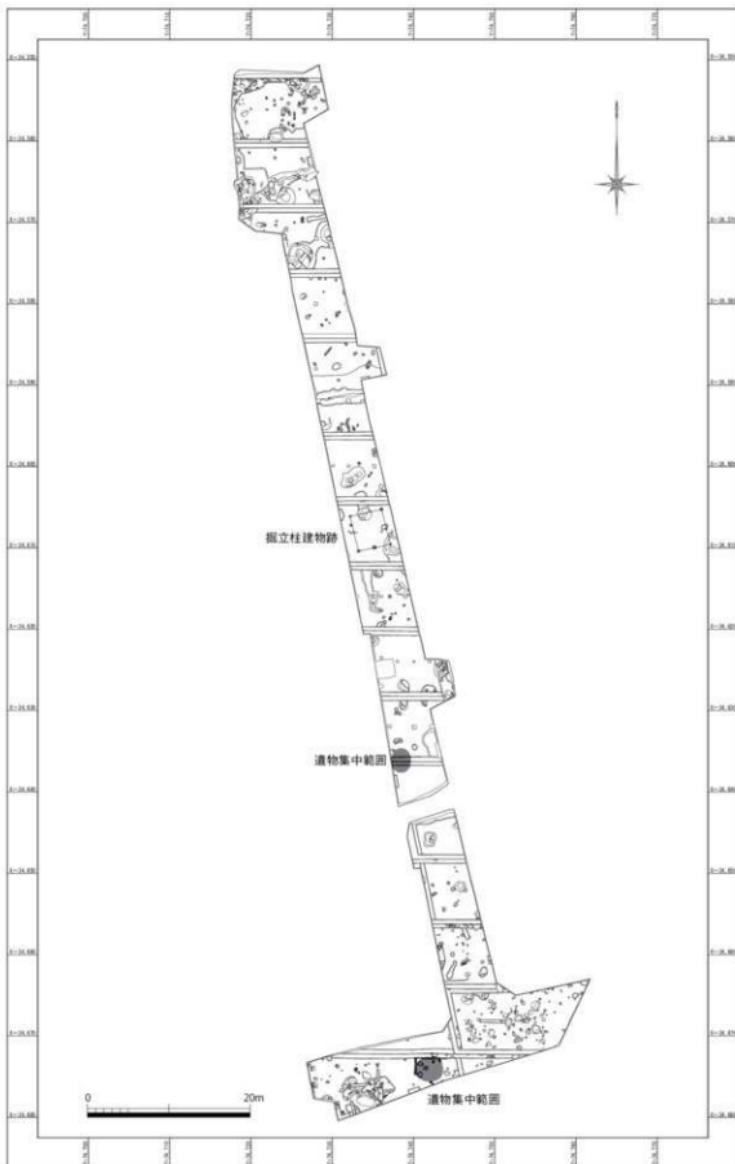


N区北壁
H=115.5m
e-a'

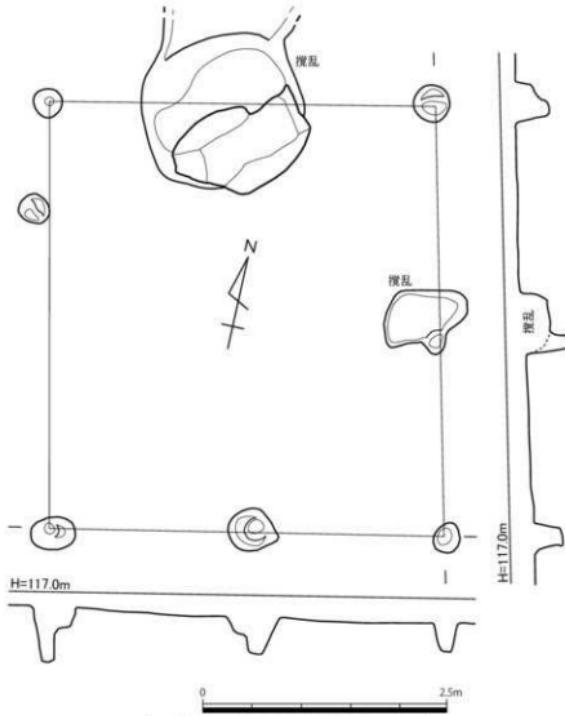




第9図 V層上面遺構配置図 ($S=1/600$)



第10図 IV層上面遺構配置図 ($S = 1/600$)



第11図 捜査柱建物跡実測図 ($S = 1/50$)

(3) 出土遺物

土器

1～38は縄文時代の資料である。38の土製品の時期については検討が必要であるが、他は縄文時代後・晩期に収まるものと思われる。

1～5は口縁部文様帯をもつ深鉢もしくは鉢である。1・2は沈線文を引き、3～5は引かない。

6～11は大きく開く口縁部の資料である。6・7は間隔の広い平行沈線を施す。12・13はどちらも肩部直上のくびれ部に貼付文をもつ。12は蝶ネクタイ状、13は短い粘土紐に刻目を施す。

14～29は深鉢もしくは鉢の底部の資料である。14～16は断面張り出しをもたないもの、17～19は断面張り出しが不明瞭なもの、20～29は断面張り出しが明瞭なものである。

30～37は精製の浅鉢である。30～35は口縁部文様帯をもつもので、口縁部文様帯には1条の沈線を引く。30はやや内傾する頸部、31～34は強く外反する頸部である。36は大きく開く口縁部の資料で、口唇部内面に1条の沈線を引く。37は扁球状の胴部に短い口縁部がつく。口縁部外面には沈線1条を引く。

38は土製の勾玉である。平成26年度の試掘調査における出土である。

39～65は弥生時代及び古墳時代の資料である。

39～51は壺である。39は亀の甲タイプを呈する口縁部である。40は逆「L」字状をなす口縁部である。41・42は口縁部直下に三角突帯を貼り付ける。43は外傾する口縁部である。44～51は非常に薄手の作りで、外傾する口縁部はわずかに内湾気味である。50の外面には炭化物が付着する。

52～59は壺である。52～55は二重口縁で、52～54は屈曲部に刻目を施す。56～58は肩部の資料で、模描文を施す。59は肩部の資料と思われ、外面には丹塗りが施されている。

60は鉢である。小さい平底の底部から胴部は大きく開いて、内湾する口縁部に至る。

61は高壺の脚部である。外面は横方向のナデ調整ののち、あらく縦方向の研磨調整が施される。

62～64は透かしをもつ器台である。いずれも上下2段となる方形の透かしが開けられていたものと思われ、その間にヘラ状工具による沈線文をいれる。

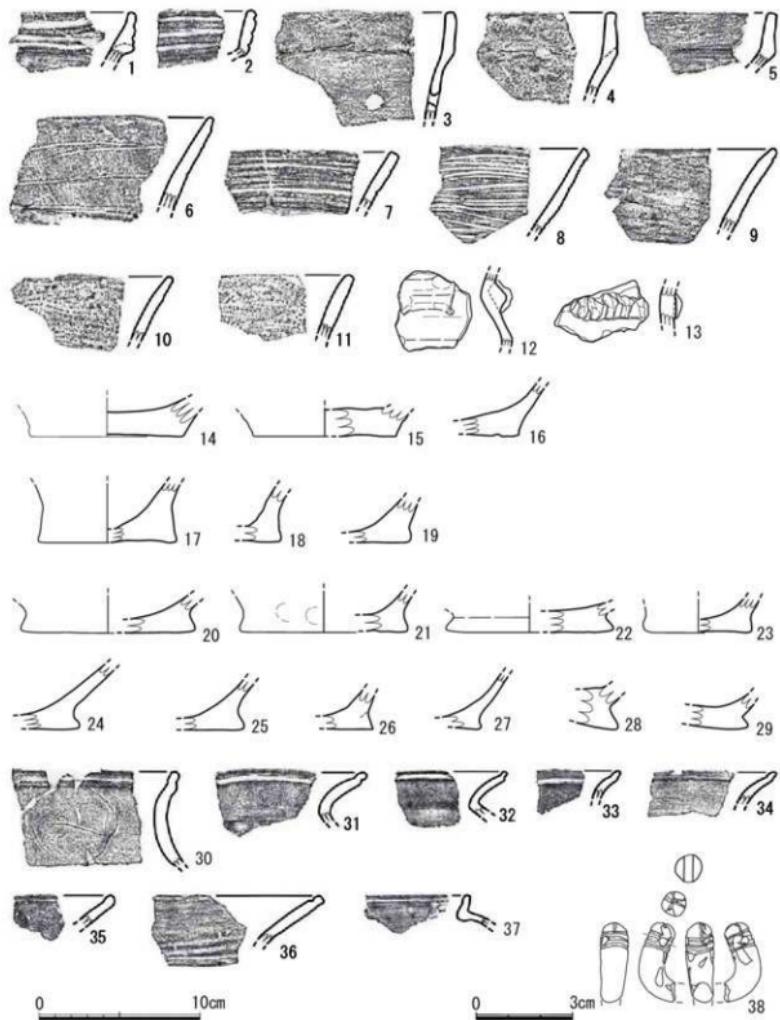
65～74は底部の資料である。65～67は平底、68～71は丸底気味の平底である。72～74は脚台である。

75～93は古代・中世の資料である。

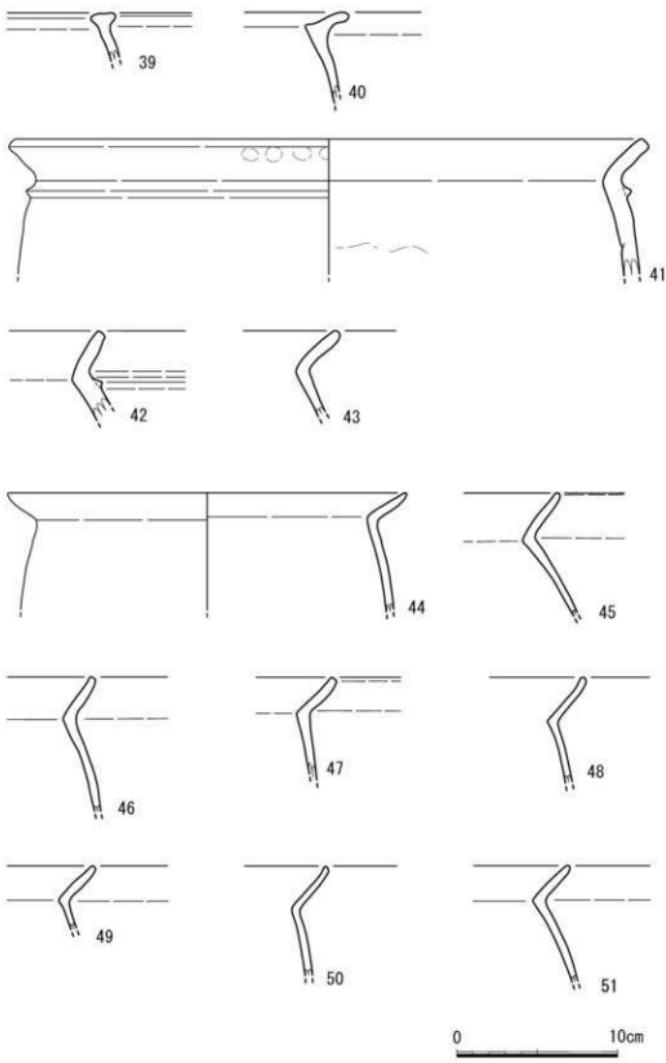
75～87は土師質の土器である。75・76は壺で、どちらも口縁部は「く」字状に屈曲して立ち上がり、内面にはハケメ調整が観察される。76の外面には炭化物が付着する。78は鉢である。

79は高台付壺である。80～87は壺もしくは皿の資料で、底面にはいずれも回転糸切りの痕跡が残る。87は口縁部に炭化物の付着があり、燈明皿として使用されたことがわかる。87の胎土は灰白色で、特徴的である。

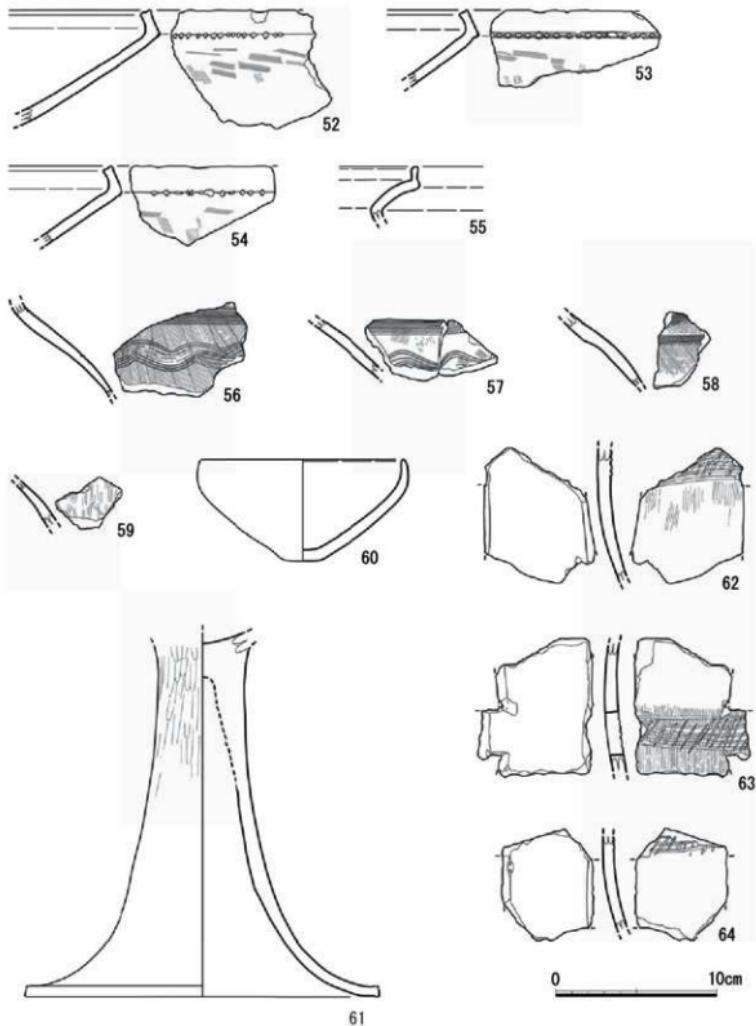
88は須恵質土器である。90は白磁で、底面まで釉がかかる。91・92は青磁である。91は外面に蓮弁文がみられる。92は壺付まで釉がかかる。92は青花の皿である。文様は発色がよくない。



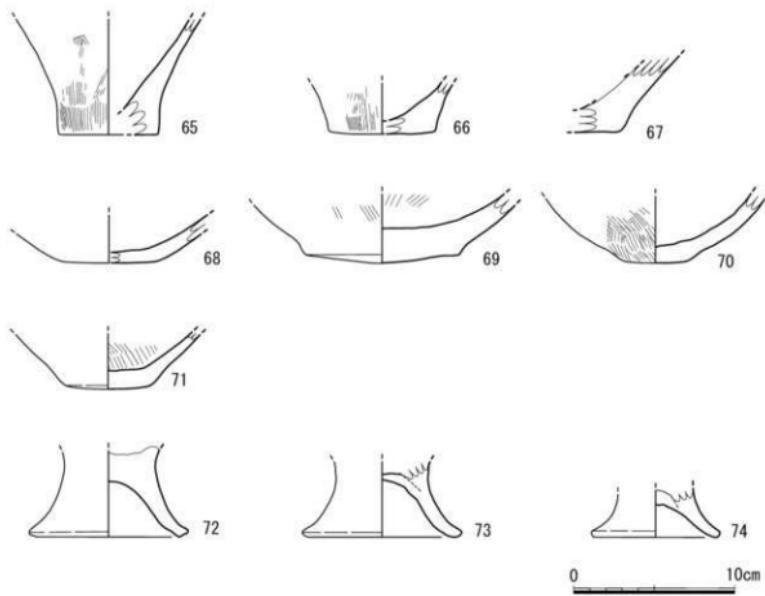
第12図 出土土器実測図① (1~37: S=1/3, 38: S=2/3)



第13図 出土土器実測図② (S = 1/3)

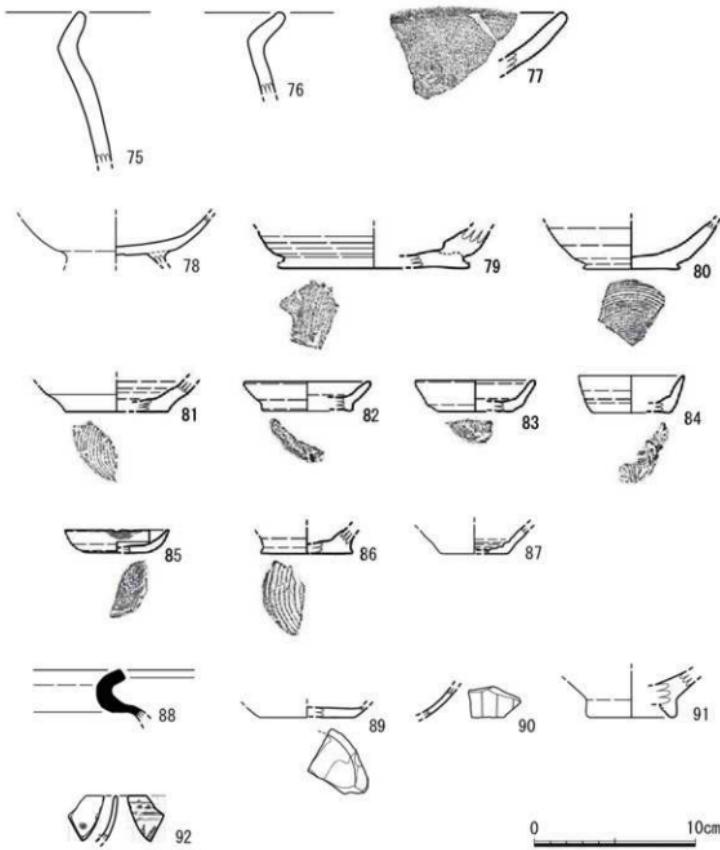


第14図 出土土器実測図③ (S = 1/3)



第15図 出土土器実測図④ ($S = 1/3$)

0 10cm



第16図 出土土器実測図⑤ (S = 1/3)

第1表 出土土器観察表①

回	番号	器種	地点	層位	文様・調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
12	1	深鉢	M 7	IV層	沈鍊／ナデ	ナデ	にぶい黄褐色・黄灰	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・赤色粒	
	2	深鉢	L 7	IV層	沈鍊／ナデ	ナデ	橙	橙	角閃石・長石・石英	
	3	深鉢	L 6	IV層	ナデ	ナデ	にぶい橙	灰・にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	焼成後穿孔
	4	深鉢	L 6	IV層	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙・褐灰	角閃石・長石・石英	
	5	深鉢	M 5	IV層	研磨	研磨	橙・黄灰	にぶい橙	角閃石・長石・石英	
	6	深鉢	M 区	II層	沈鍊／ナデ	貝殻条痕	灰黃褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	7	深鉢	H 区	-	沈鍊／ナデ	ナデ	にぶい橙	橙	角閃石・長石・石英	
	8	深鉢	X 8	Ⅲ層	貝殻条痕	ナデ	橙	橙・黄灰	角閃石・長石・石英	
	9	深鉢	T 8	Ⅲ層	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色・暗灰	橙	角閃石・長石・石英	
	10	深鉢	J 8	Ⅲ層	貝殻条痕	ナデ	黒褐色	灰褐色	角閃石・長石・石英	
	11	深鉢	I 区	IV層	擦過	ナデ	褐灰	明赤褐色	角閃石・長石・石英	
	12	深鉢	O 区	IV層	ナデ	ナデ	褐・明赤褐色	橙・褐	角閃石・長石・石英	纏ネクタイ状突起の貼付文
	13	深鉢	K 7	IV層	貝殻条痕	ナデ	灰褐色	にぶい黄褐色	長石・石英	貼付文
	14	深鉢	E 区	IV層	ナデ	ナデ	にぶい橙	角閃石・長石・石英		
	15	深鉢	AG 8	IV層	ナデ	ナデ	にぶい橙	褐灰	角閃石・長石・石英・雲母	
	16	深鉢	AH10	IV層	ナデ	ナデ	橙・にぶい黄褐色	褐灰	角閃石・長石・石英・赤色粒	
	17	深鉢	J 6	IV層	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	褐灰	角閃石・長石・石英・雲母	
	18	深鉢	M 6	IV層	ナデ	ナデ	にぶい橙	灰黃褐色	角閃石・長石・石英・雲母	
	19	深鉢	U 8	IV層	貝殻条痕	ナデ	橙	浅黃褐色	角閃石・長石・雲母・赤色粒	
	20	深鉢	AG11	Ⅲ層	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	21	深鉢	I 区	Ⅲ層	ナデ	ナデ	橙	灰黃	角閃石・長石・石英・赤色粒	
	22	深鉢	X 8	Ⅲ層	ナデ	ナデ	明赤褐色・にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	23	深鉢	R区南側トレンチ	IV層	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	24	深鉢	AF12	IV層	ナデ	ナデ	明赤褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	25	深鉢	AD10	IV層	ナデ	ナデ	橙	橙	角閃石・長石・石英	
	26	深鉢	-	IV層	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・長石・石英・雲母	
	27	深鉢	W 8	IV層	擦過・ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	角閃石・長石・石英・雲母	
	28	深鉢	AG 8	IV層	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・長石・雲母・赤色粒	
	29	深鉢	Ah	IV層	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・長石・石英・雲母	
	30	浅鉢	N 6	IV層	沈鍊／研磨	研磨	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	31	浅鉢	L 7	IV層	沈鍊／研磨	研磨	にぶい黄褐色	黒	角閃石・長石・石英	
	32	浅鉢	X 8	Ⅲ層	沈鍊／研磨	研磨	黒褐色	黒褐色	長石・石英	
	33	浅鉢	Y 8	IV層	沈鍊／研磨	研磨	橙・灰褐色	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英・雲母	
	34	浅鉢	I 区	-	沈鍊／研磨	研磨	黒褐色	黒褐色	角閃石・長石・石英	
	35	浅鉢	TP. 9	Ⅲ層	沈鍊／研磨	研磨	橙	橙	角閃石・長石・石英	
	36	浅鉢	X 8	IV層	研磨	沈鍊／研磨	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	角閃石・長石・石英	
	37	浅鉢	AB 9	IV層	沈鍊／研磨	研磨・ナデ	灰黃	にぶい黄褐色	角閃石・長石・石英	
	38	勾玉	TP. 23	Ⅲ層～V層一括	研磨	-	にぶい橙		角閃石・長石・石英	
13	39	裏	C 区	IV層	ナデ	ナデ	明褐色	橙	長石・石英・雲母	
	40	裏	V 8	Ⅲ層	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	長石・石英・雲母	

第2表 出土土器観察表②

回	番号	器種	地点	層位	文様・調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
13	41	甕	U 8	Ⅲ層	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙・黄灰	角閃石・長石・石英	
	42	甕	I 区	Ⅲ層	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石・長石・石英・雲母	
	43	甕	U 8	Ⅲ層	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石・石英・雲母	
	44	甕	Q 区	Ⅲ層	—	—	灰黄・橙	橙・暗灰黄	角閃石・長石・石英	
	45	甕	U 9	Ⅲ層	ナデ、ハケメ	ナデ、ハケメ	にぶい橙・黒	にぶい橙	長石・石英	
	46	甕	X 8	IV層	ナデ	ナデ	橙	橙	角閃石・長石・石英・雲母	
	47	甕	X 8	Ⅲ層	ナデ	ナデ	明黄褐	橙	角閃石・長石・石英	
	48	甕	Y 8	IV層	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	角閃石・長石・石英・雲母	炭化物付着
	49	甕	AO10	Ⅲ層	—	ハケメ	橙	橙	角閃石・長石・石英・雲母	
	50	甕	Y 8	IV層	ナデ	ナデ、ハケメ	にぶい褐	橙	角閃石・長石・石英・雲母	炭化物付着
14	51	甕	AH8	IV層	ナデ、ハケメ	—	橙	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英	
	52	甕	JK 区	Ⅲ層	斜目／ハケメ	ハケメ	黄褐	黄褐	角閃石・長石・石英・雲母	
	53	甕	X 8	IV層	斜目／ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙	にぶい橙	角閃石・長石・石英・雲母	
	54	甕	X 8	IV層	斜目／ハケメ	ハケメ	明褐・にぶい黄褐	にぶい黄褐	角閃石・長石・石英・雲母	
	55	甕	W 8	Ⅲ層	—	—	灰黄褐	橙	角閃石・長石・石英	
	56	甕	W 8	IV層	柳描文／ナデ	ハケメ	橙・暗灰黄	橙	角閃石・長石・石英	
	57	甕	W 8	IV層	柳描文／ナデ	ハケメ	橙	橙	長石・石英	
	58	甕	U 8	IV層	柳描文／ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙	橙	角閃石・長石・石英	
	59	甕？甕？	T 7	IV層	研磨	ハケメ	赤（赤彩）	にぶい橙	長石・石英・赤色粒	外側丹塗り
	60	甕？甕？	—	Ⅲ層	ナデ	ナデ	橙	橙・黄灰	角閃石・長石・石英	
15	61	高环	Y 8	Ⅲ層	ナデ・研磨	ナデ	にぶい橙	橙	長石・石英・雲母・赤色粒	
	62	器台	Y 8	Ⅲ層	沈離文／ナデ	ハケメ・ナデ	にぶい橙・褐灰	にぶい黄橙	角閃石・長石・石英	透しあり
	63	器台	Y 8	Ⅲ層	沈離文／ナデ	ハケメ・ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石・長石・石英	透しあり
	64	器台	Y 8	IV層	沈離文／ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	角閃石・長石・石英	透しあり
	65	甕	AI 8	IV層	ハケメ	ナデ	橙	橙	長石・石英	
	66	甕	X 8	IV層	ハケメ	ナデ	橙・にぶい黄橙	橙・灰褐	角閃石・長石・石英	
	67	甕	—	Ⅲ層	ハケメ	ナデ	にぶい黄橙・灰	にぶい黄橙	角閃石・長石・石英・赤色粒	
	68	甕	H II 区	—	ハケメ	ナデ	橙・暗灰	橙	角閃石・長石・石英	
	69	甕	Q 区	Ⅲ層	ハケメ・ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石・石英・雲母・赤色粒	
16	70	甕	AC 9	Ⅲ層	ハケメ	ハケメ	黄灰・にぶい黄橙	褐灰	角閃石・長石・石英	
	71	甕	AG11	Ⅲ層	ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙・橙	橙	角閃石・長石・石英	
	72	台付甕	—	IV層	ナデ	ナデ	橙	橙・褐灰	角閃石・長石・石英	
	73	台付甕	Y 8	IV層	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙・橙	角閃石・長石・石英	
	74	台付甕	IJ 区	Ⅲ層	ナデ	ナデ	にぶい黄褐・橙	橙・灰褐	角閃石・長石・石英・赤色粒	
	75	甕	TP. 22	Ⅲ層～IV層一括	ハケメ・ナデ	ハケメ	灰黄褐	灰黄褐	長石・石英・雲母	
	76	甕	U 8	IV層	ハケメ・ナデ	ハケメ	にぶい橙	にぶい橙	長石・石英・雲母	炭化物付着
	77	培培カ	N 区	II層	ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	長石・石英・雲母	
	78	环	E 区	II層	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい黄橙・にぶい黄褐	長石・石英	
	79	茶入カ	PO-RQ トレンチ	II層	ナデ	ナデ	橙・にぶい黄橙・褐灰	橙	長石・石英	回転系切り
	80	环	N 区	II層	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石・石英	回転系切り

第3表 出土土器観察表③

図	番号	器種	地点	層位	文様・調整		色調		胎土	備考
					外面	内面	外面	内面		
					ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石・石英	回転糸切り
	81	环	PQ-ベルト	Ⅱ層	ナデ	ナデ	明赤褐	明赤褐	長石・石英・雲母	回転糸切り
	82	小皿	O区	Ⅱ層	ナデ	ナデ	橙	橙	長石・石英	回転糸切り
	83	小皿	O区	Ⅱ層	ナデ	ナデ	橙・褐灰	橙・にぶい赤褐	長石・石英	回転糸切り
	84	小皿	Q区	Ⅱ層	ナデ	ナデ	橙・にぶい黄褐	橙	長石・石英	回転糸切り
	85	环	O区	Ⅱ層	ナデ	ナデ	橙・にぶい黄褐	橙	長石・石英・雲母・赤色粒	回転糸切り
	86	小皿	Q区	Ⅱ層	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石・石英	回転糸切り、口唇部に炭化物付着
16	87	环	AH9	Ⅲ層	ナデ	ナデ	灰白	灰白	長石・石英・雲母	
	88	壺	O区	Ⅱ層	タタキメ	タタキメ	灰	灰	長石・石英	
	89	皿	J区	Ⅱ層	—	—	胎土：灰白・釉：灰白	—	黑色粒	
	90	碗	O区西側トレンチ	Ⅱ層	通井文	—	胎土：灰汁色・釉：灰汁色	—	—	
	91	碗	O区	Ⅱ層	—	—	胎土：シルバーグレイ・釉：オーリーブドライブ	—	—	
	92	碗	PQ-BQトレンチ	Ⅱ層	團雛・列点・芭蕉文	—	胎土：アイボリホワイト・釉：アイボリホワイト・文様：ねずみ色	—	黑色粒	

石器

1～10は石鎌である。7・8はサヌカイト製、9はチャート製、他は黒曜石製である。1・2は平基のもの、3は内済する基部のものである。4～8は凹基で脚部をもつものである。6は長さ3.6cmの比較的大型品で、表裏両面に素材面を大きく残した剥片鎌である。9・10は五角形を呈する。

11は黒曜石製石錐である。12は厚手の黒曜石剥片である。13は幅の広い小型の剥片で、片面には自然面を大きく残す。末端部には二次加工が認められ、直線的である。

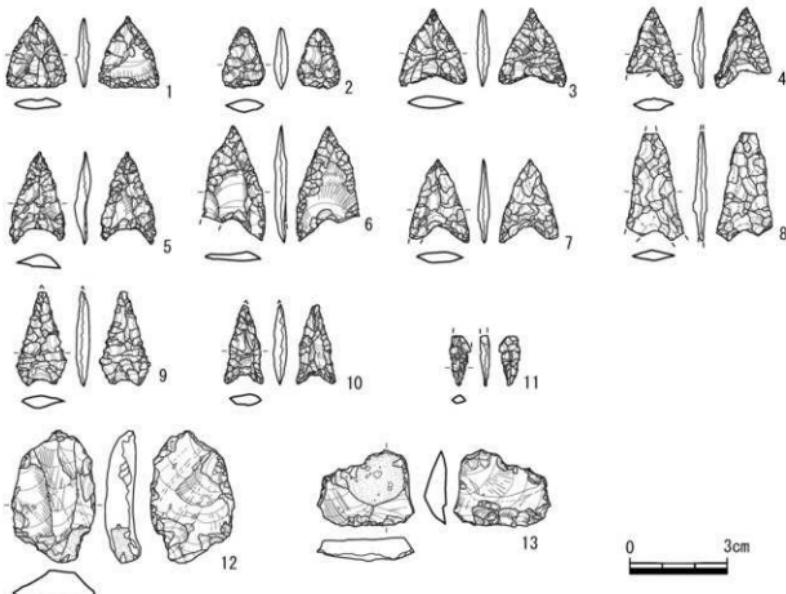
14・15は砂岩製で、接合はしないが同一個体である可能性が高い。どちらも片面に研磨が施されており、周縁には剥離が認められることから、磨製石斧から何らかの転用が図られ、その途中に破損したものであろうか。

16は安山岩を素材としており、表裏面に研磨が施されているが、刃部を研ぎだすには至っていない。磨製石斧の未製品か、平坦化を図った打製石斧であろうか。17は頁岩製の磨製石斧未成品で、全体に整形のための剥離と敲打痕が認められる。研磨は行われていない。

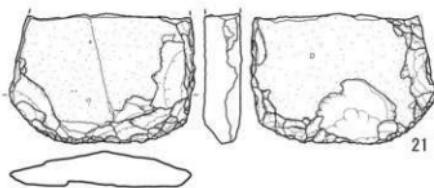
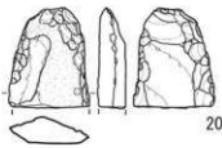
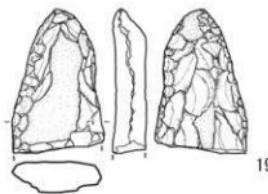
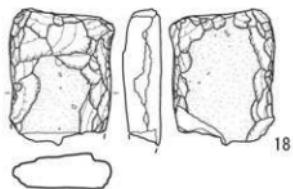
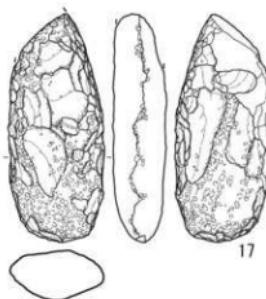
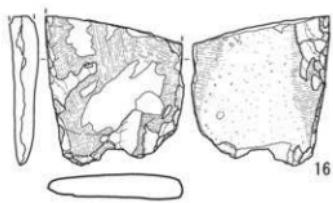
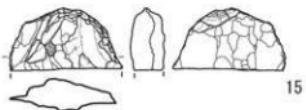
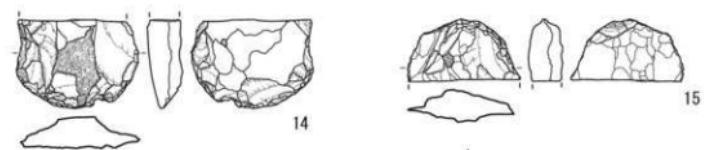
18～24は打製石斧で、いずれも安山岩製である。18～20は基部の資料、21～24は刃部の資料である。22は使用による刃部及び側辺の摩耗が著しい。

25は安山岩製の円盤状石器で、周縁に剥離加工が行われている。

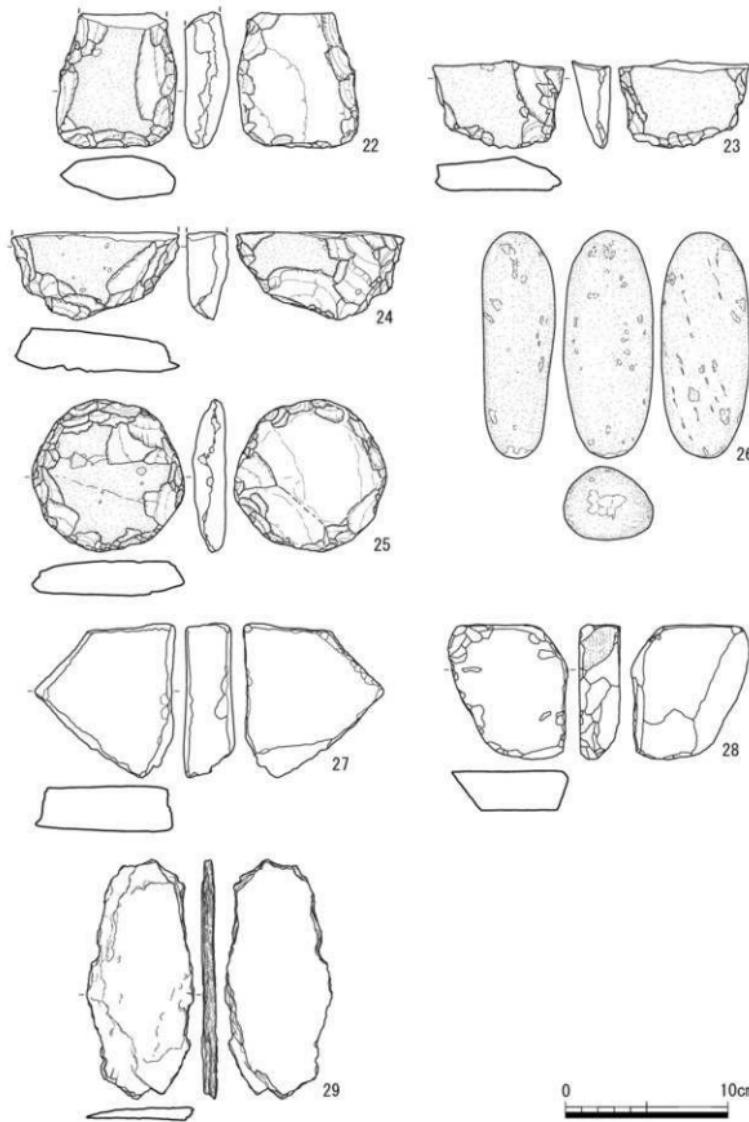
26は安山岩の水磨礫で、敲石として使用した可能性がある。27・28は砂岩製の砥石である。29は板状の結晶片岩である。加工や使用の痕跡は認められない。



第17図 出土石器実測図① (S=2/3)



第18図 出土石器実測図② (S = 1/3)



第19図 出土石器実測図③ ($S = 1/3$)

第4表 出土石器觀察表

図番号	器種	石材	地点	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	
1	石鏃	黒曜石	Q区	II層	2.2	1.8	0.4	1.1		
2	石鏃	黒曜石	AG11	IV層	1.9	1.3	0.4	0.8		
3	石鏃	黒曜石	D区	IV層	2.4	2.1	0.4	1.2		
4	石鏃	黒曜石	G区	II層	2.5	1.7	0.4	0.9		
5	石鏃	黒曜石	AI7	III層	2.8	1.7	0.5	1.2		
6	石鏃	黒曜石	M区	IV層	3.5	1.9	0.4	1.8		
17	7	石鏃	サスカイト	K5	IV層	2.5	1.8	0.4	1.1	
8	石鏃	サスカイト	L7	IV層	3.3	1.7	0.4	1.6		
9	石鏃	チャート	AF13	IV層	2.9	1.6	0.4	1.5		
10	石鏃	黒曜石	Q区	II層	2.4	1.2	0.4	0.9		
11	石錐	黒曜石	AF11	III層	1.5	0.6	0.3	0.2		
12	剥片	黒曜石	N区	II層	4.1	2.6	1.1	10.1		
13	剥片	黒曜石	N区	II層	2.4	3	0.7	4.0		
14	磨製石斧柄用品	砂岩	AH9	IV層	5.4	7.5	2.2	102.0		
15	磨製石斧柄用品	砂岩	AF12	IV層	3.8	6.9	2.1	56.0		
16	磨製石斧未成品	安山岩	Ah	IV層	9.2	8.5	1.7	167.2		
18	17	磨製石斧未成品	頁岩	O区	III層	14.1	5.9	3.3	381.5	
18	打製石斧	安山岩	L7	IV層	8.4	6.5	2.3	204.7	刃部欠損	
19	打製石斧	安山岩	I区	IV層	8.8	5.7	2.1	129.7	刃部欠損	
20	打製石斧	安山岩	J6	IV層	6.1	5	1.7	62.7	刃部欠損	
21	打製石斧	安山岩	—	IV層	8.0	11.4	2.4	285.0	基部欠損	
22	打製石斧	安山岩	M-N带 セント	III層	8.3	7.4	2.8	236.4	基部欠損	
23	打製石斧	安山岩	AH6	IV層	5.4	8.1	2.4	104.0	基部欠損	
24	打製石斧	安山岩	AG11	III層	5.4	10.3	2.5	164.8	基部欠損	
19	25	円盤状石器	安山岩	G区	IV層	9.4	9.4	2.1	223.3	
26	敲石	安山岩	—	IV層	13.9	5.5	4.5	423.5		
27	砥石	砂岩	—	IV層	9.4	8.6	3.2	332.9		
28	砥石	砂岩	I5	IV層	8.3	7.4	2.5	220.3		
29	—	粘晶片岩	—	IV層	14.7	6.6	0.9	97.2		

図 版



遺跡上空から高岩山を望む（南から）

図版 2



本調査区俯瞰（写真上が北）



調査区南側西壁（南東から）



R区内ベルト中央付近（南西から）

図版 4



E区北壁（南東から）



J区北壁（南東から）



N区北壁（南東から）



調査区北側V層上面（北西から）



調査区南側V層上面（北から）



掘立柱建物跡（北西から）

図版 6



Q区弥生土器集中地点（西から）



遺物出土状況①



遺物出土状況②



遺物出土状況③

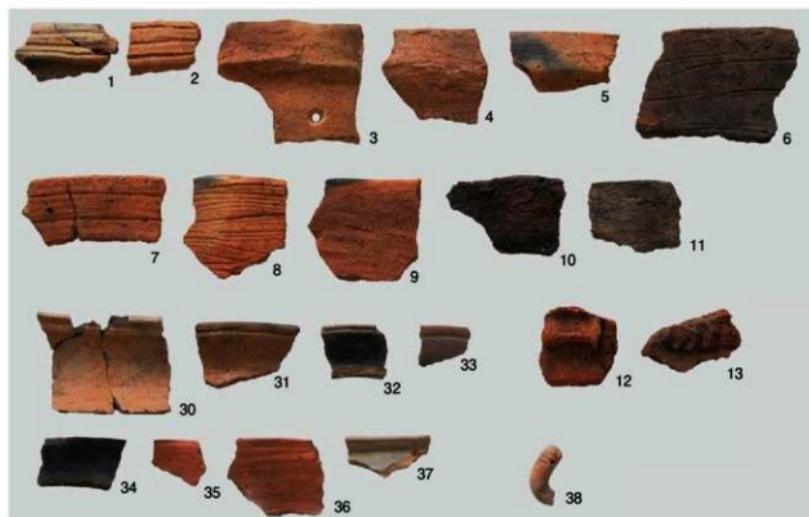


表土剥ぎ状況



作業状況

図版 8



出土土器①



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26



27



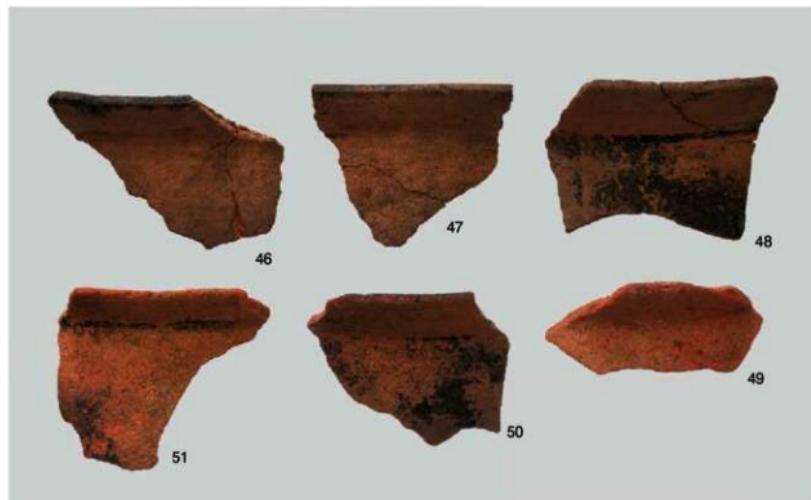
28



29

出土土器②

図版10

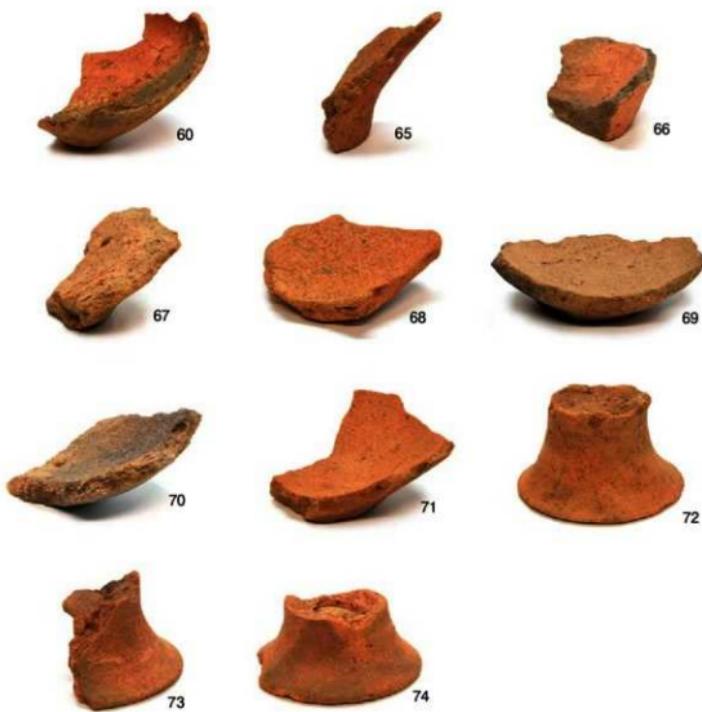


出土土器③

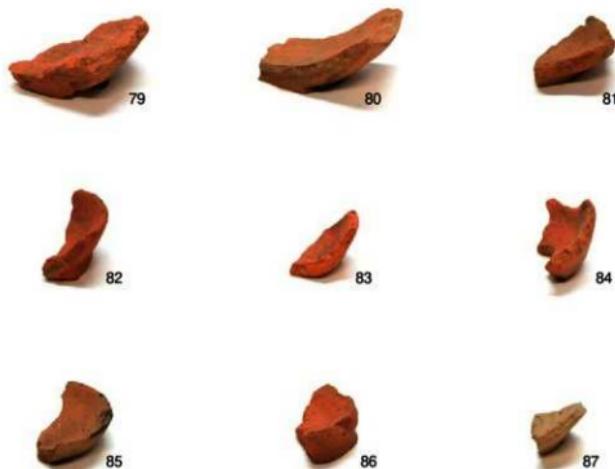


出土土器④

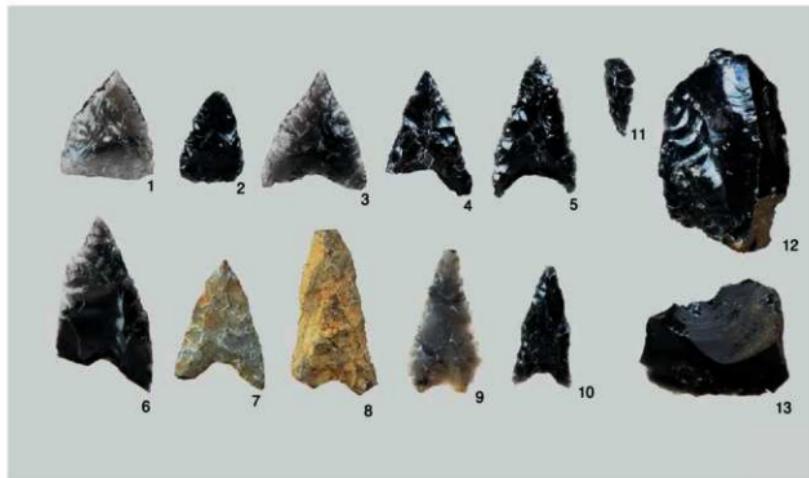
図版12



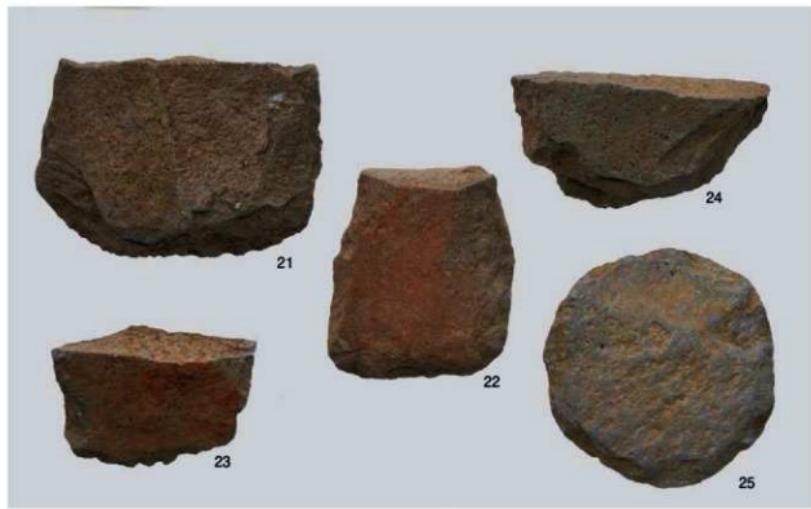
出土土器⑤



出土土器⑥



出土石器①



出土石器②



出土石器③

報告書抄録

ふりがな	いしはらいせき							
書名	石原遺跡							
副書名	水利施設等保全高度化事業特別型（畠地帯担い手育成型・見岳地区）に伴う発掘調査							
卷次								
シリーズ名	南島原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	本多 和典、小川 慶晴							
編集機関	南島原市教育委員会							
所在地	〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地 TEL 0957-73-6705							
発行年月日	西暦2021年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°	'			
いしはらいせき 石原遺跡	みなみしまばらし 南島原市 にしありえちょう 西有家町	42214	147	32° 41' 07"	130° 17' 49"	180831 ～ 190308	1066m ²	農業基盤 整備事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
石原遺跡	遺物包含地	縄文時代 弥生時代 中世	掘立柱建物跡	縄文土器 弥生土器 石鎌 打製石斧 貿易陶磁				

南島原市文化財調査報告書 第26集

石原遺跡

2021.03.31

発行 長崎県南島原市教育委員会

〒859-2412 長崎県南島原市南有馬町乙1023番地

印刷 株式会社 昭和堂